

地震予知の歴史 が変わります！

◎熊本地震の1週間前に
前震（4回連続）と本震（5回連続）を
観測！そしてその通りの地震が発生！！
地震前兆を電磁気観測で
完全に捉えました。世界初！

竹田局 1 ヶ月グラフ, 異常の 1 週間後に地震発生

前震

本震

各余震

4 回の異常と地震発生が一致

前震

5 頁の本震グラフへ

竹田局の 4 月 5 ~ 6 日 12 時間グラフ 青ラインが熊本からの FM 電波で +25dB up です。

前震 No 1
震度 7 烈
M g 6.4
深さ 10 Km

前震 No 2
震度 7 烈
M g 6.4
(4 分後)

前震 No 3
震度 6 弱
M g 5.7

前震 No 4
震度 6 強
M g 6.4

4 月 14 日
前震

こんな地震予報ならPerfect!

1週間前に前震4回、本震5回と予報可能!

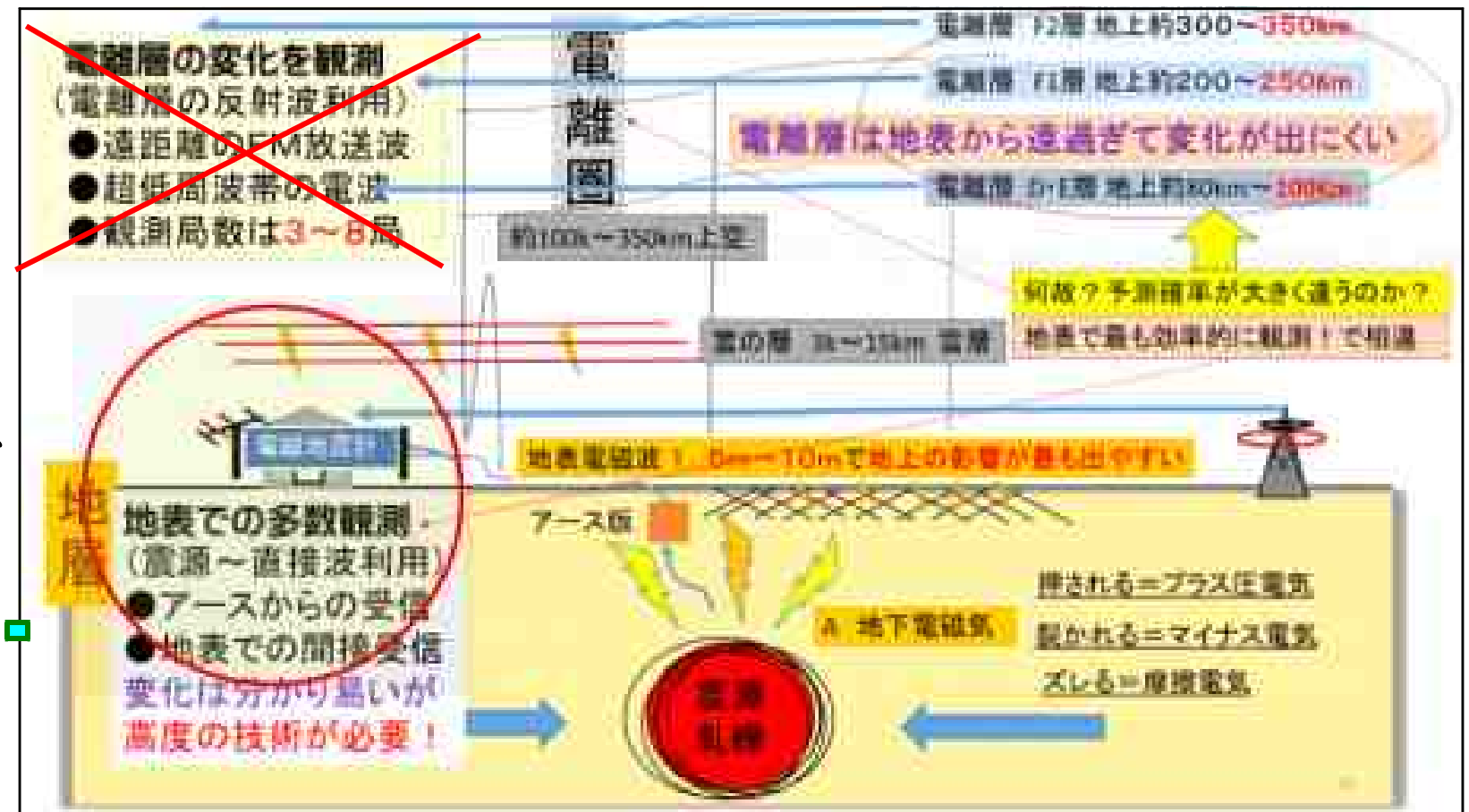
理論的な解説(仮説と予想含) (下図は理想的な電磁観測)

地球の外周は、堅い岩盤等で作られた「地殻」で、周囲からの諸圧力で固まっています。

- 1 **地殻**の深部は、引力や重力等による圧力と下からマグマ等の突き上げで**超高压状態**です。
- 2 地球は自公転等による①**海洋潮汐**(数m)や、②月や太陽等の引力で、赤道付近は**地球潮汐**(月は±約40cm、太陽は±約17cm)の撓みで毎日揉まれ、目に見えない変形があります。
- ③地殻**プレート**が**移動**(年間数Cm)しており岩盤には圧力等が掛かり歪みが多重です。

地震発生の原因?

地殻には(±)の超強力な**押し合いへし合い**が繰り返され、震源付近では岩盤や岩石等の耐力が、限界(臨界)を越えると、**微少破壊**が始まり、拡大していくと**断層破壊(=地震)**に発展するのです。そこで、私達は**地震予知**の為、**地殻内での圧力集中場所(圧電気発生)**を探し、**微少破壊などの電磁変化を観測し、地震の発生を予測**しています。



世界初の（根拠）は？

（**いっ**）前震と本震の**前兆を1週間前に予報！**

（**どこ**）場所は、観測網の敷設が**必要！** 現在40ヶ所

（**震度**）**震度は、6以上±0.5は100%予測率！**

（**特1**）前震は、4連続の地震と判別できた。

（**特2**）本震は、5連続の地震と発表可能！

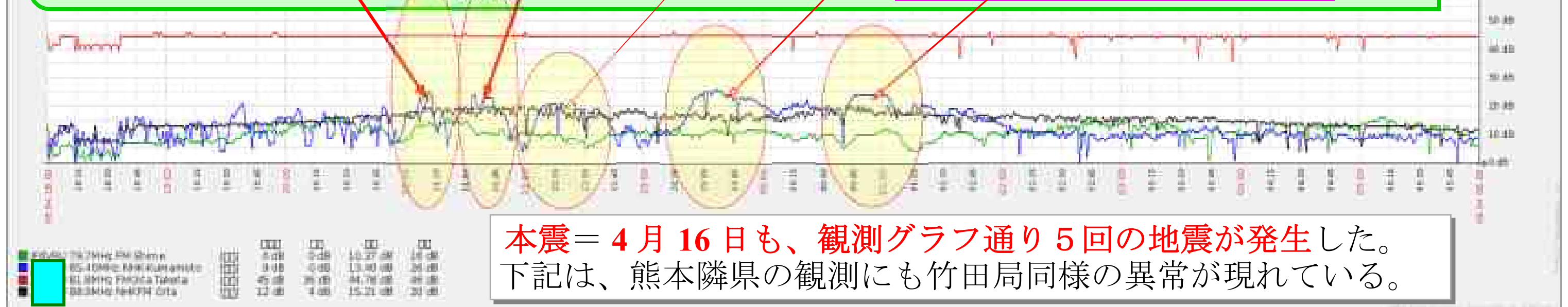
（**特3**）余震も、ほぼ予測通りに地震が発生！

（結果）地震は電磁観測網で予測すれば、

「安全に暮らせます！」



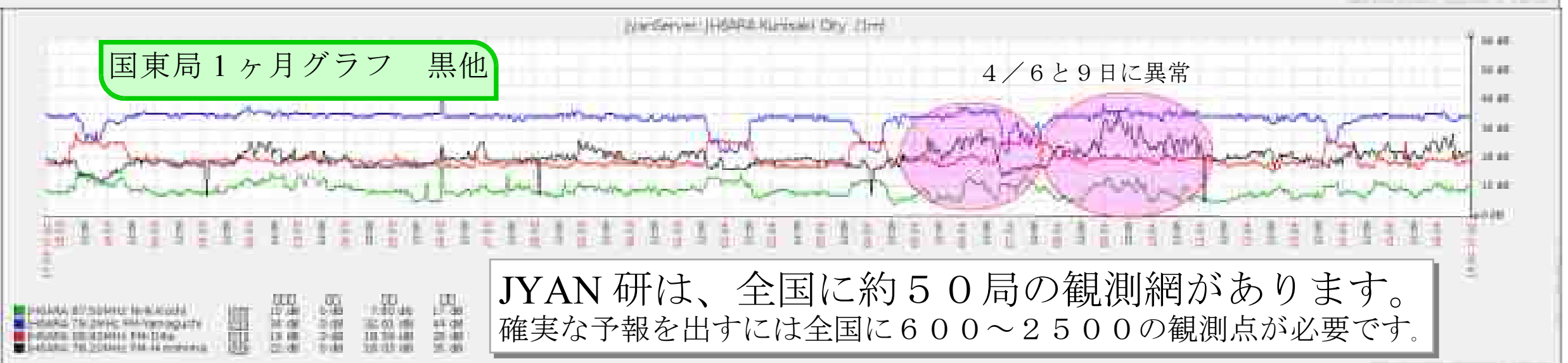
竹田局 4月8～9日12時間グラフ 青色線が FM 熊本の電波の強さです。 5回のピークと各地震の発生が全部一致です。



熊本地震で、大地震が2回続く事が判ったのは、当該 JYAN 研のみ、前震4回と本震5回の群震迄が読めました！
世界初！の観測です。

Amateur 無線家は電波の観測に最適です！世界の地震観測をリード中！！

国東局 1ヶ月グラフ 黒他



◎上図青線 Graph は、本震も 5 回連続で地震が来る！と判る絶賛の観測です！

○観測 Graph には異常なレベル上昇と地震発生が連動していました。

これは即ち、
電磁気が異常に発生した証拠なのです！

では、どうして＜震源の変化が、観測グラフの異常変化になる？＞

◎岩石等の軋轢や、クラックで、「電磁気」が発生します！また、
○押されると圧電気が発生し、
○引き剥がされると負の電気が、発生します。そして○擦れると摩擦電気が発生するのです。

結論＝「物が動けば電磁気が発生する！」アインシュタインの理論を元に、帰納的に地震の電磁気理論を構築し、電磁実験を重ねた結果、

電磁気観測で地殻内部の動きが判る＝地震予知可能！



電磁誘導作用が根拠!

震源で発生した電磁気は、電磁誘導作用で周囲へと広がり、地表にも伝わります。

- 直流電気は、岩石等の絶縁体があれば、伝導困難で伝わりません。しかし、静電気や磁気は、岩石等の絶縁体があっても、殆ど関係無く伝わる事ができます。
- 同様に、**電磁気は電磁誘導作用があり、導体の間に、絶縁体があっても、コンデンサと同じ働きをして伝わる事ができるのです。**(2011年静岡の地震学会にて地下深くからの電磁誘導を発表しました)
- ラジオノイズ等の電磁波も交流なので「電磁誘導作用」で、容易に伝わってきます。

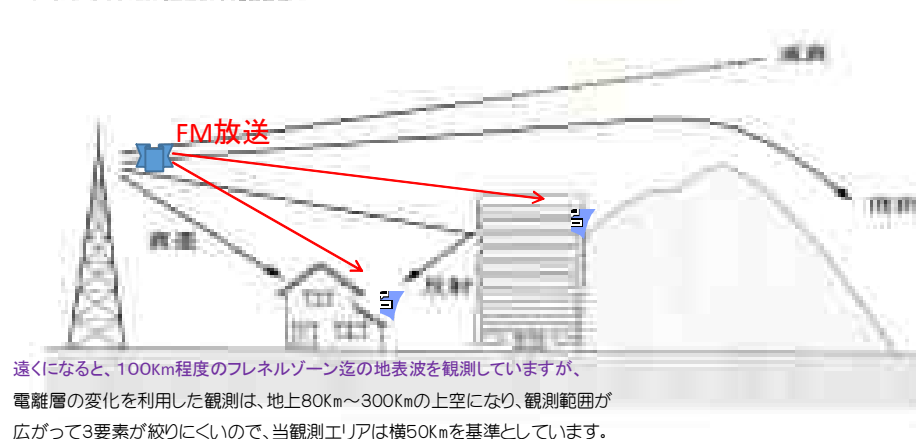
資料

電磁波の観測は各種ありますが、当観測網では地表を伝わるFM放送電波等やアースから直接受信して、**揺らぎ現象等を観測**しています。

・ FM波の観測では、直接波を受信するため数m～数十m高の見通しアンテナで受信し、電波Dataを収集しています。なお、直接波観測は、電界強度の「±」両方向の観測が

・ 大事で予測には貴重なデータとなります。

図2-4 電磁気性質



FM受信用
ダイバシティ
アンテナの例

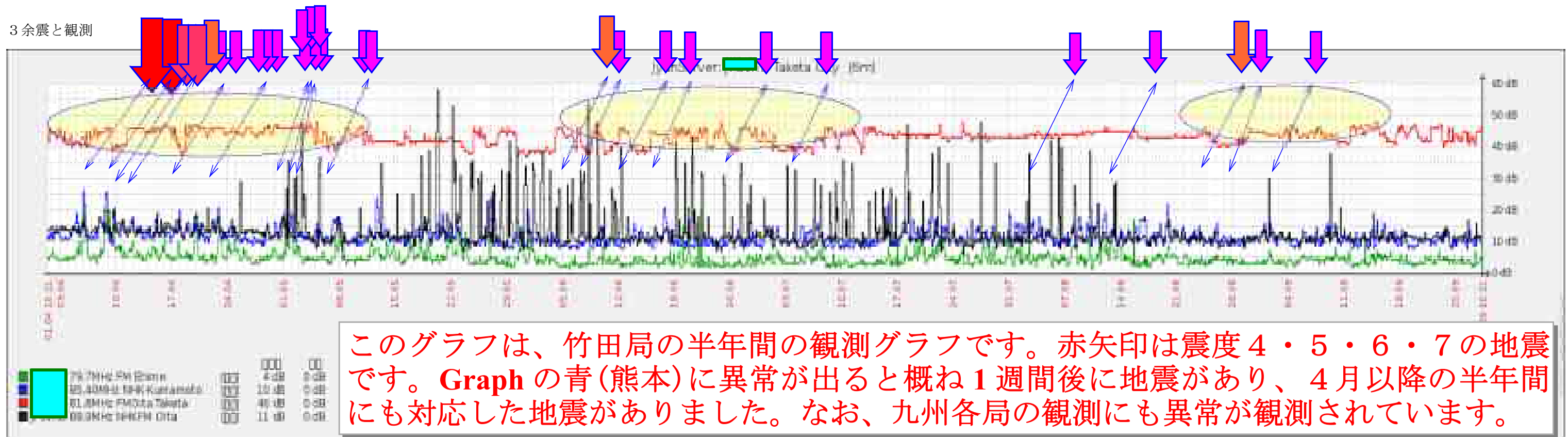
その根拠は

- 1 地震前にスパーク(放電=電気や静電気等)や、ラジオノイズ等がたくさん観測されています。
- 2 電磁誘導作用は、学論的に十分証明されており、コイル等も馴染み深い現象ですね。

結果 深い地下からでも、電磁気が発生すれば、地表にも直ちに届いているのです。

この電磁気を見逃さずに追求しました。地下深くの観測には、地表で電磁観測を行えば、地下深くで起きている震源の動きを窺い知ることができるたのです。

左図は= FM 放送の直接波等の受信状況です。



◎上の図は、竹田局の一年間の観測グラフです。黒色（FM 大分）は E-supo による混信です。特殊な方法で弁別する事ができます。また、別の手法を使うと正逆等の断層判定も電磁観測で可能です。

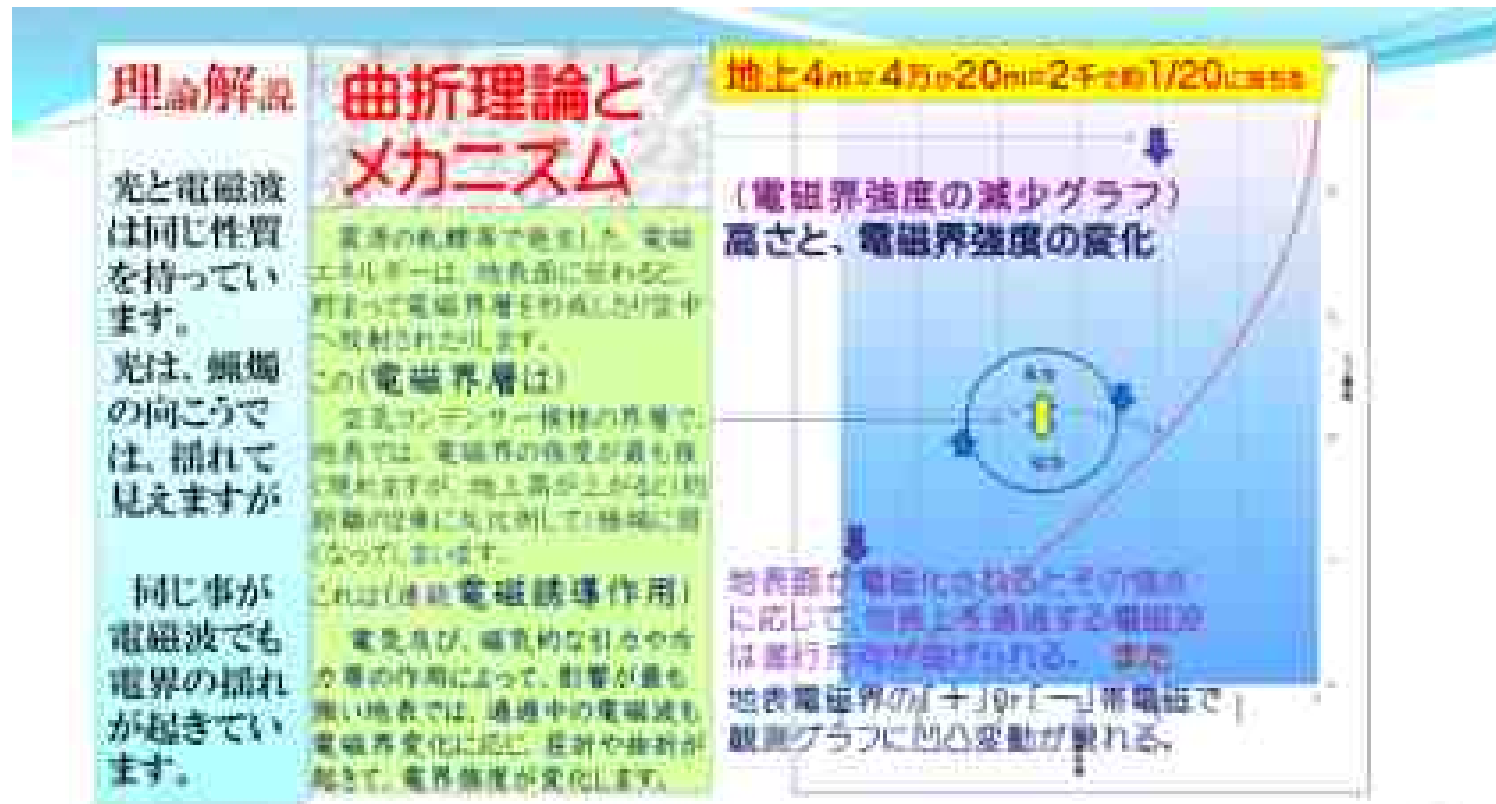
◎左の図の解説

- 1 左図は、沖永良部島の噴火から半年後に鹿児島西で M7 の地震が発生し、半年後に熊本で M7.1 の地震が発生しました。
- 2 熊本地震に触発されて、大分でも地震が連続で発生しました。断層帯の方向性が明白でしたが、4～5月に延長上の伊予沖で、強いノイズを観測していました。
- 3 伊予沖のノイズは7月頃から減少傾向になったので、延長線上で、半年後の地震を予想し、10月の鳥取地震があたりです。
- 4 結局、噴火と周囲での地震発生は関係があります。（経験則）
- 5 地殻歪みの伝播速度は100 Km/半年、二回目200 Km/半年、三回目300Km/半年で次第に早くなるようです。（今回の経験則）

電磁波の屈折と曲折現象

まず、**屈折現象**とは（**光の屈折と同じで、電波の屈折現象**です。）

○地下の震源付近から伝わった電磁気は、地上に届いて貯まり上空へと電磁界層を形成します。この電磁界層は傾斜型の電磁界層です。○左図にある傾斜型の電磁界層の中を電磁波が横切ると、電磁界の濃い=強い方向に「**屈折作用**」が起きます。
(参考 シュリーレン現象や電波ミラージュ 2011年地震学会発表)



電波の曲折作用 (ブラウン管偏向作用と同様) = 電磁的な (引力や斥力) で電磁波にも電磁気による偏向で曲折現象が起こります。○電磁波の伝搬ルートに、土に変化する電磁界があれば、電磁波にも引力や斥力が働いて伝搬ルート自体に**偏向曲折が発生**します。これは電磁波自体に**電磁気的な引力や斥力が働いて、偏向的曲折が発生**したもので、電界強度が変化します。

写真は B10-7222 クルックス管 CT-TR (偏向極板入り)

結果 ①地下震源の輾轉～②電磁気の発生～③地表迄伝導～④地表電磁界の変化～⑤電波の屈曲折～⑥電界**グラフ**の変化となります。そして、**異常検出～経験則と照合解析～地震予報の発表**となります。地表での観測は上中下の3方式が必要で、**全国的な観測網の敷設が条件**となります。



未来の地震観測と地震予報

耐震化が進んでも、地震予知は必要なの？

確かに、震度4～5クラスまでは問題ありません。しかし、突然の大地震、そして前触れの無い大噴火、これらの自然の大災害は、実は、防ぎようがありません。不幸にも災害に遭遇してしまえば、殆ど生き延びる術はありません。大地震と大噴火等から助かる方法は「**予報で避難**」するだけなのです。

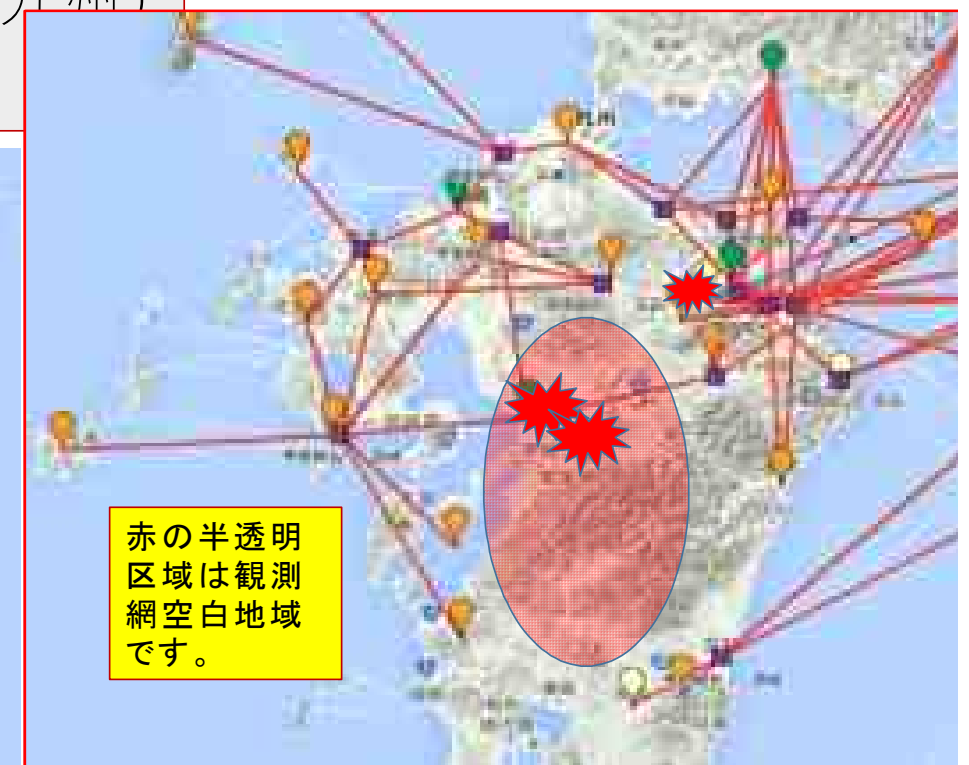
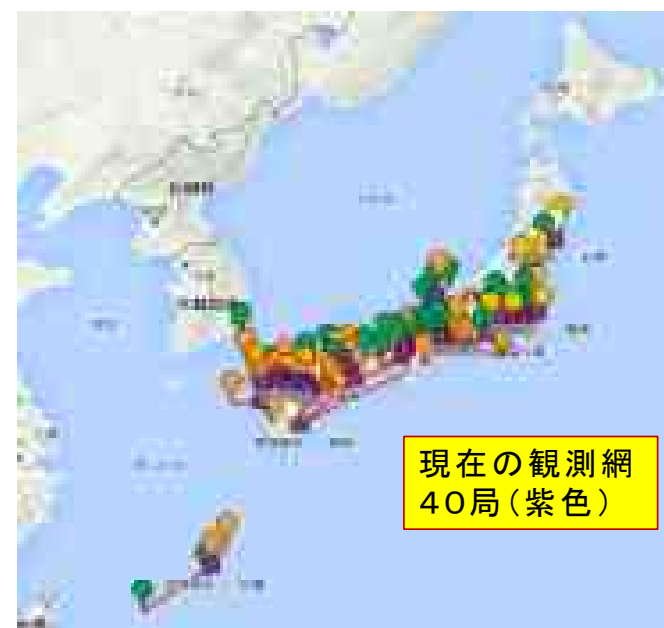
この難問を解決するには、私が提唱している電磁観測網の全国敷設しかありません。国民の安全を図るのは国の仕事です。従って、いくら費用が嵩む（数十億～数百億円）からと、言っても、避けては通れません。

これまでは、地震警報（超高感度地震計利用）地殻変動（GPS 利用による地表観測）海洋観測（太平洋に地震観測網設置）を行いましたが、全て地震予知は失敗でした。これでは、命の安全は保てません。

私達は確かな観測証拠を以て、電磁観測方式を提唱しています。K 庁に採用をお薦めします。技術協力は惜しみません。但し、WeatherNews のように、民間資金で観測網敷設や予報を行う方法もあります。

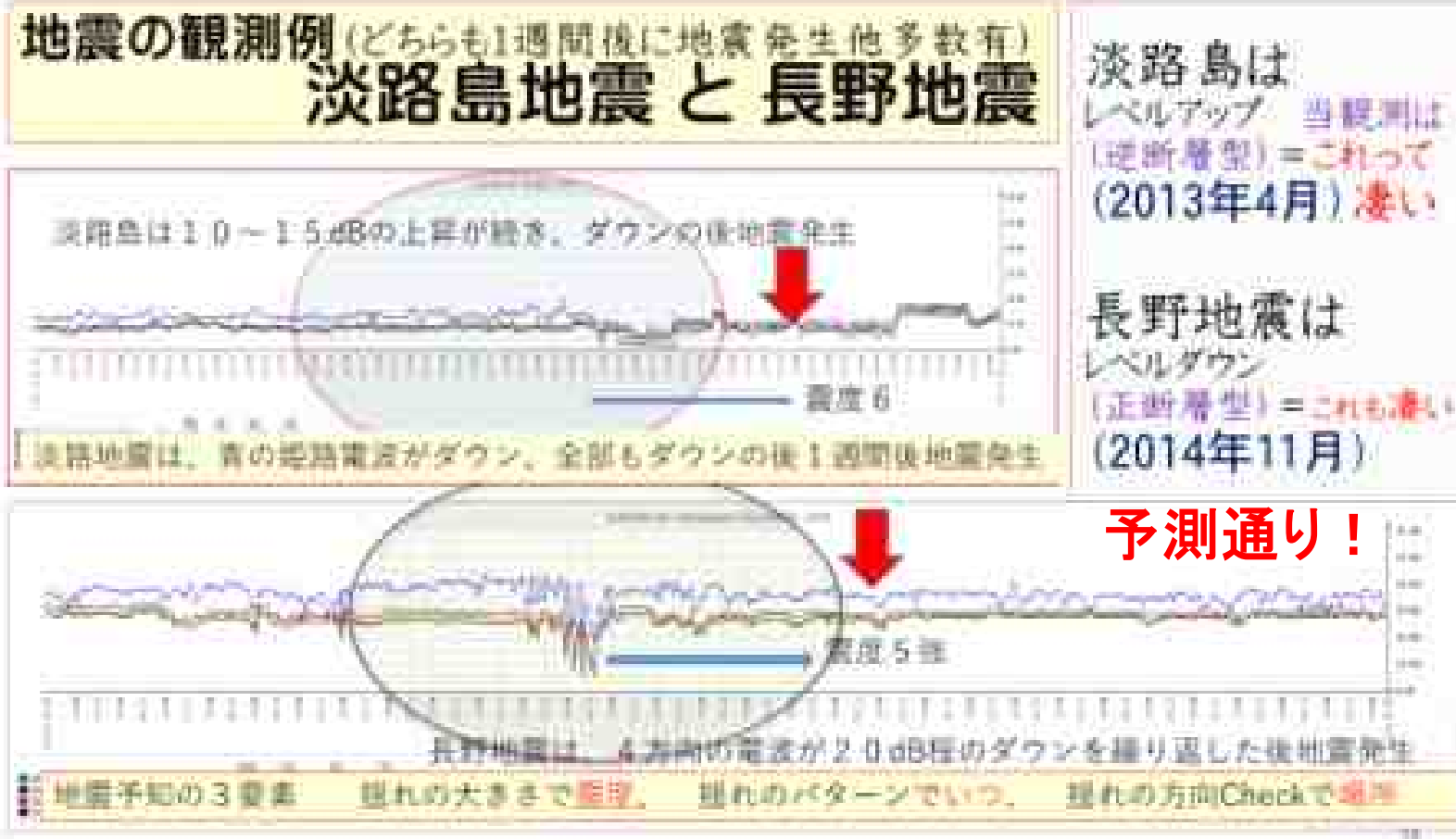
私達は、地震を予知する方法を考案し、実験し、証明しました。後は観測システムの構築で確実に大勢の命が助かります。但し、**地域別に観測システム導入も良策です**。技術指導や援助を致します。

現観測局配置図(九州)
「熊本県のみ無し」



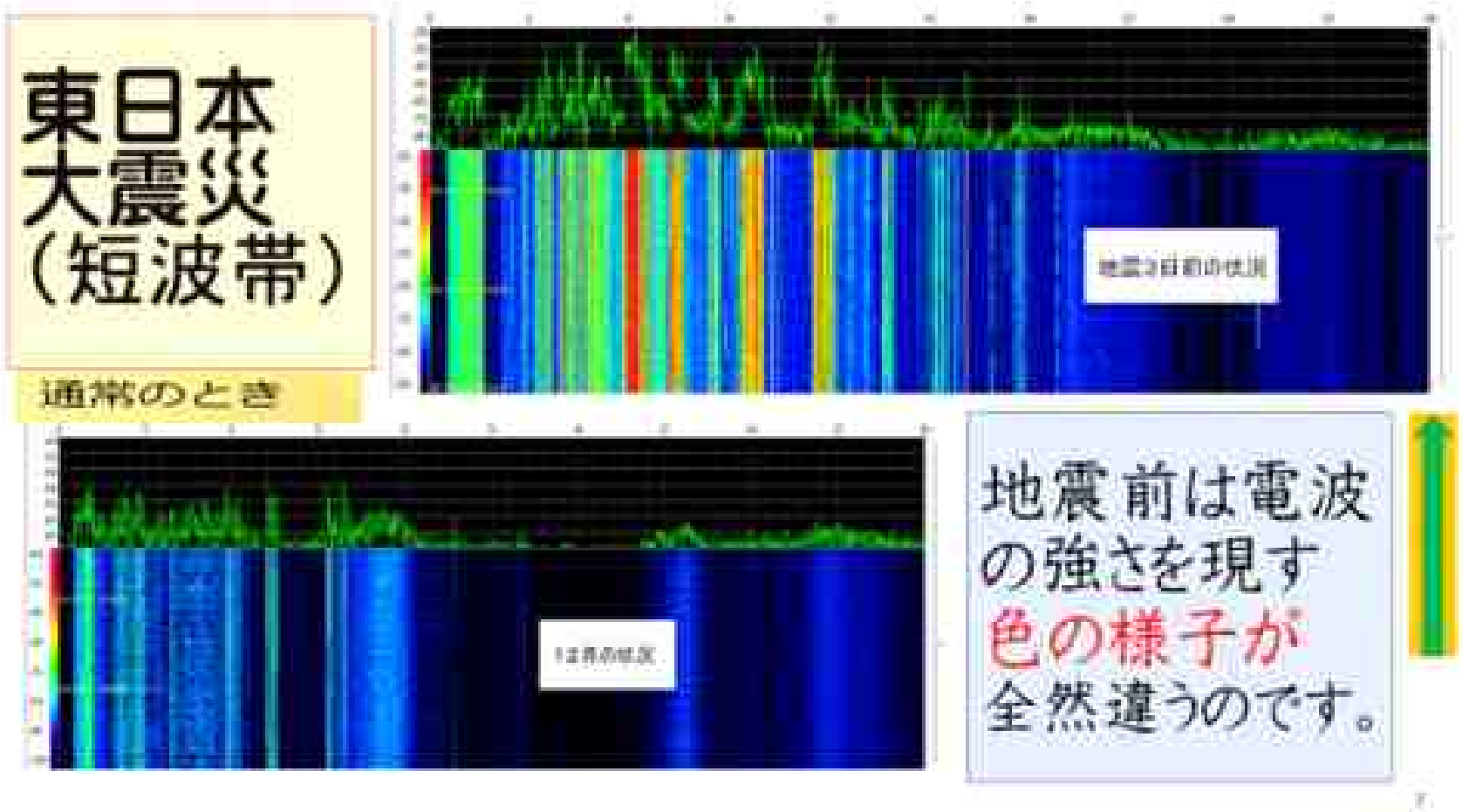
参考 なぜ？地震予知はでき無かったの？

実は、J学会やK庁が本気取り組んでいません。可能性のある研究に、進んで取り組もうとしていないのです。私は、阪神大震災を契機に、不思議な電磁現象と地震を結びつけ、**22**年に渡って研究を積み重ねました。観測は、**殆どの電波や観測方式、空中線等を使って、実験**を行い、多くの疑問を解決し開発を行ってきました。お陰で、新発見が続いています。私達は **Amateur HAM** なので、電磁現象は得意分野ですし、偏見も無く、最先端の無線工学や電磁技術を容易に導入できるのです。



最後に、

地震は、全て原因があり、起きるべくして起きた自然現象です。揺れも、縦、横、上下などの揺れ方によって、電磁現象も正逆等の断層や横ずれ断層等の揺れ模様が現れてきます。私には断層予測技術も (世界で私だけ) あり、最新では、地震の発生日や発生時間迄、ほぼ予測できる目処が立ちました。しかし、適正な観測網の敷設が必要です。地震は、命に直結する研究だけに、最優先される必要がありますが、遅々として進んでいません。各位には、良きアイデアとご協力をお願いします。



◎資料 地震研究と JYAN 研究会の経歴

- ・2007年 5月 災害情報学会、日本地震学会などに入会、その後日本地球惑星科学連合学会入会
 - ・2009年 5月 ハムの月刊誌「CQ」で4月・5月に研究会員募集、15名でJYAN研究会発足
 - ・2009年10月 日本地震学会(京都大学)で地震電磁波などの監視方式などを発表
 - ・2011年10月 日本地震学会(静岡)で電磁気などの異常理論を発表
 - ・2012年 8月 東京ビッグサイトのハムフェアに出展(このときから、毎年展示～連続5回)
 - ・2013年 7月7日 JYAN大分ネット第2回総会で研修会を実施
 - ・2013年10月2日 産経新聞夕刊「1面トップ」にJYAN研究会紹介
 - ・2014年 3月14日 2時7分頃伊予灘で地震発生 全面記録できる
 - ・2014年12月25/26日 日本地震予知学会(電通大)で2項発表
 - ・2015年 5月25日～26日 JGUの学会大会(幕張)2項の発表
 - ・2016年4月14&16日の熊本地震でM7クラスが2回来る事を観測と予測できたのはJYAN研のみ！
 - ・2016年12月5日 日本地震予知学会のニューズレター第3号に2Pで当JYAN研が紹介されました。
 - ・2017年3月5日 西日本ハムフェアで熊本地震での地震観測状況などを講演し好評でした。
- 学会等の発表及び講演 日本地震学会4回、JpGU3回&講演22回(2017-5JpGU発表予定)
記事=CQ5回新聞4回 観測網は全国で50局が(200波)を観測中！
地震予知アマチュアネット(地震前兆ノイズ研究会・会員ML等350名超・大分県国東市)
JYAN研究会&地震予測観測網 会長 JH6ARA 國 廣 秀 光

○ 地震の未来予想図
天気予報と同じようになります。
来週の天気予報＝来襲の地震予報
晴れ、雨、曇り＝いつ、どこ、震度

地震の	有る率	基準
0%	=	無し
10～30%	=	少し
40～60%	=	半々
70～90%	=	ほぼ
100%	=	有る

現在、スマホ用の HP を公開しています。
メールでの配信も試験的に行っています。
希望者は

メールアドレスと市町村名と氏名（又はコールサイン）を、別添の申込用紙に記入してください。（無料です。維持費が少し必要です）

地震予報の例	いつ	どこ	震度	有る率
例 1 通常	来週土曜日を中心に、	大分県北部地方で、	震度 5 クラスの地震が、	5 0 %の予想です。
例 2 直近	明後日頃（日）	杵築・国東地方で	震度 5 弱の地震が	8 0 %の予想です。
例 3 直前	明日未明（時間）	国東沖で	震度 5 の地震が	有るでしょう
例 4 短期	来月終わり頃（月）	九州地方で	震度 5 クラスの地震が	5 0 %の予想です。
例 5 長期	半年後くらいに（年）	九州・四国地方で	震度 6 クラスの地震が	2 0 %の予想です。
例 6 世界	数ヶ月後くらいに	中国の西部で	震度 7 クラスの地震が	5 0 %の予想です。

震度と警報の例

震度 3～4 注意報、5～6 弱警報、6 強～ 7 特別警報 1 2